

日本で栽培されているたばこ種類は大きく分けて以下の3種類です。そのたばこ種類の中に栽培品種がいくつかあります。

■在来種(Domestic)

たばこの葉はもともと自然の通風条件下で乾燥されてきました。こうした乾燥法の原型を保っているものを在来種としています。日本では江戸時代から明治31年(1898)までは各地域ごとに多数の固有な品種が栽培されていましたが、その後何回にもわたる整理の結果、現在では数品種で小面積にすぎません。香喫味(こうきつみ)はからっとしており、火つきがよいのが特徴です。

■バーレー種(Burley)

世界的には黄色種について多く生産されている品種です。元来、北米の在来種から突然変異で生じたものといわれ、一般のたばこに比べて葉色が薄い傾向にあります。日本での一般的な乾燥法は、パイプハウスなどの乾燥施設で自然な湿度の日変化の繰り返し(自然乾燥)により、長い日数(約1ヶ月)をかけてゆっくりと乾燥を進めます。乾燥における葉色は黄色から褐色に変わっていきます。品質の良い乾葉(かんば)は独特のチョコレート様の香りがあります。

日本では岩手、青森、秋田、福島の各県を主産地としています。

■黄色種(Flue-Cured)

世界的に最も多く生産されている品種です。収穫葉は乾燥室(機)の中に吊り込み人工的に加熱(37~40℃)しながら黄色にし、以後次第に昇温と排湿をはかり黄色に固定して乾燥します。一回の乾燥は吊り込み点火後、80~120時間で終了します。乾燥中に葉中のでんぷんの糖化が行われるので、乾葉(かんば)は特有の甘い香りがします。

日本では北は新潟県から南は沖縄県まで広く栽培されています。

■国内栽培品種一覧

種類	内容種	来歴(育成経過)	導入年次	病害抵抗性	
在来種	第1在来種(委託耕作)	水府	国分葉の系統を受け継いだ国府葉を明治43(1910)年に改称	—	—
		出水	安政(1854~60)年間に導入された丸葉が変異したと推定される	—	—
		指宿	種子渡来時期は古く、慶長10(1605)年との記録がある。葉型は水府葉系	—	—
	第2在来種	松川関東	古くからあった水府の系統から選抜、育成されたと推定される	—	黒根病(中)、赤星病(中)
	第3在来種(委託耕作)	中だるま	1902年多くの内容種が整理され、1991年から中だるまに統一	—	立枯病(高)、赤星病(中)、うどんこ病(R)
第5在来種	白濁州1号	遠州×バーレー21より選抜固定	1968(S43)	黒根病(中)、TMV(R)	
バーレー種	第1バーレー種	バーレー21	アメリカで育成昭和32年~36年の品種比較試験を経て導入	1961(S36)	黒根病(中)、TMV(R)、野火病(R)
		JT-バーレー18	(BWB×B105)×バーレー21より育成	2013(H25)	立枯病(中)、疫病(中)、黒根病(中)、野火病(中)、TMV(中)
		たいへい	みちのく1号×バーレー21より育成	1991(H3)	黒根病(中)、野火病(R)、TMV
	第2バーレー種	JT-バーレー16	(BWB×B105)×バーレー21より育成	2010(H22)	立枯病(中)、疫病(中)、黒根病(中)、野火病(中)、TMV(中)
		みちのく1号	バーレー21の変異個体を形態選抜	1987(S62)	黒根病(中)、野火病(R)、TMV
黄色種	第1黄色種	Co319	ヒックス×Co139よりアメリカで育成	1973(S48)	立枯病(中)、疫病(中)
		JT-黄色70	(FFF×FCC)×FFFより育成	2006(H18)	立枯病(中)、疫病(中)、黒根病(中)、TMV(R)、PVY(R)、うどんこ病(R)
		Va115	ヒックス×Co139よりアメリカで育成	1973(S48)	立枯病(低)、疫病(中)、黒根病(中)
	第2黄色種	MC1号	ヒックス2号×Co139より育成	1972(S47)	立枯病(低)、疫病(中)、黒根病(中)
		JT-黄色69	(PPF×F227)×F227のF1から半数体育種法により育成	2006(H18)	立枯病(中)、疫病(中)、黒根病(中)、TMV(R)、PVY(R)、うどんこ病(R)
	第3黄色種	BY4号	在来プライトエロー系から紅葉の出ない個体を選抜	1956(S31)	—
	第4黄色種	つくば1号	F212×MCB12のF1から半数体育種法により育成	1983(S58)	立枯病(高)、疫病(中)、黒根病(中)、TMV(R)、うどんこ病(R)

注) TMV:タバコモザイク病、PVY:黄斑えそ病

病害抵抗性 高:高度抵抗性、中:中度抵抗性、低:程度抵抗性、R:病気にかからない抵抗性